

クリスマス公開講演会

キリストの生涯（御業）と降誕の秘義

——ヨハネによる福音書第3章1～36節ほか——

2019年12月22日（京都KKRくに荘）

奥田 昌道

ヨハネ伝3章の「イエスとニコデモとの対話」キリストは天から降ってこられた 人間は本来霊的な存在者 青年時代の回心 人、新たに生まれずば「まぶねのなかに」（讃美歌「こゝろ」番） 天への橋渡し 光と闇 自分の逝く先をまず確保して 十字架は最大の奇跡 この火既に燃えたらんには あなたの逝き先は予約されてますか？ 私の十字架は無駄死にか 私は天国人です 永遠の生命、霊と肉 イエスとニコデモとの対話 癒し 慰め 復活して顕現したイエス 祈り

●ヨハネ伝3章の「イエスとニコデモとの対話」

今日は講演会と銘打っていますけれども、私は、これは本当に大事なしばらくの時間、それをしつかり掴^{つか}んでいただきたいという思いでいます。来年に講演会がまたあるかどうかは、誰にもわからない。我々の生命^{いのち}というのは、いつどこで召されるかわからない。キリストは、

「世の終わりは近い。最後の審判の時が近い」

という緊張感の中で福音を語っておられます。

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

と言われた。伝道の第一声はそれですから。世のキリスト教がどういうものか、そういうことは私は知りませんけれども。

資料の「講演の要旨と聖書箇所」というところをちよつとご覧いただきたいと思います。

ここに、ヨハネ伝3章の「イエスとニコデモとの対話」のことが引いてあります。

新約聖書（新共同訳）のヨハネによる福音書3章をお読みします。

「1さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であつた。2ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行ふことはできないからです。」3イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」4ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入つて生まれることができるでしょうか。」5イエスはお答えになった。「はつきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入



ることはできない。⁶ 肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。⁷ 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。⁸ 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。』⁹ するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。¹⁰ イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分らないのか。¹¹ はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。¹² わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。¹³ 天から降^{くだ}って来た者、すなわち人の子のほかには、

キリストは自分のことを「人の子」と表現しておられる。

天に上った者はだれもない。¹⁴ そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵ それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。¹⁶ 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷ 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸ 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹ 光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。²⁰ 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。²¹ しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。』……³¹ 「上から來られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から來られる方は、すべてのものの上におられる。³² この方は、見たこと、聞いたことを証されるが、だれもその証しを受け入れない。³³ その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。³⁴ 神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が『霊』を限りなくお与えになるからである。³⁵ 御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。³⁶ 御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。』（ヨハネ3・1～36）

この最後はおそろしいですね。

「神の怒りがその上にとどまる」



なんて、そんなとどまってもらったら、とんでもないことです。困ります。けれども、ここに書かれているニコデモとのイエスの問答、これが本当に大事なところです。

●キリストは天から降ってこられた

といいますのは、我々は、土から生まれたものは土に還るかえんです。ところが、イエスという方は天におられた方です。天におられた方が人としてわざわざ地にくだつてきた。だから、降誕節の「降誕」というのは、降りてくる「降」と、誕生の「誕」ですね。上からきたんですよ、降くだつてきた。降つてくる神が本ものです。太陽は上から我々を照らしてくれます。雨は上から降ってきます、虹もかけます。すべて天に属するもの、これが本当の実在界なんです。地上界の我々はいわばそこへの一歩手前なんです。

普通の人は、この一歩手前でみなもう満足して、あとは追悼会をやる。追悼会なんて、その人の霊がどこにあるかわからないくせに、追悼会とか慰霊祭とかやってますけれども、霊魂というのはそんな簡単に無くなるものではないでしょ。霊魂が暗い暗闇で苦しんでいるのを助けるために、お坊さんは、昔フィリピンとかいろんな所で戦死した人たちのために祈ったんですよ。

人間というのは、土から生まれて土に還る。肉なる人間はそうですけれども、それで終わりではない。そんな安っぽいものではない。人間は本来、永遠の生命体として神さまの次元に生きるのが本来のすがたであつて、その前段階として我々は地上に生命をたまわつた。皆さん、本当にそうなんですよ。

「肉なるもので播まかれ、霊なるものに甦よみがえる」

と、パウロは復活のところで言っている。コリント前書15章で。

「始めに肉なるものがあつて、それが霊なるものに変貌していく」

と、復活のことをそういうふうパウロは言ってます。そこを

「あつ、これは復活のことを言っているけれども、実は我々の存在そのものの地上の在り方がまさにその通りだ」

と。私たちは肉体をもつて生まれてきました。ニコデモが言ってますように、お母さんから、両親から生まれてきたわけです。そして、今だったら100歳前後でその生涯を閉じたときには、また土に還っていく。

キリスト召団のお墓というのが亀岡にあるんですよ、見晴らしのいい所にね。あそこの京都キリスト召団の墓にもう十数人の名前が刻まれています。十数人というのは、まだ生きていた人間も刻んであるんです（笑）。生きていた人間は朱色ですが、それが亡くなったらちゃんとした本ものになるわけです、変貌するんです、チェンジするんです。死ぬということは——たしかに皆さんとお別れするのはつらいですよ——でも、実在界に、今の現象界から、見える世界から見えない本ものの世界に変わっていく、転化していくんです。



それは進歩をとげるんですよ。だから、向こうは輝いている。その輝いているところからキリストは来てくれたわけですよ。

●人間は本来霊的な存在者

皆さんは、頼んだのですか、

「キリストよ、来てください」

と。頼まないけれども、二千年前に来てくれた。しかも、キリストがおいでになることは、旧約聖書でちゃんと預言されているんです、至るところに、やがて救い主が現れるということが。そして、マラキ書のあと三百年ほどたって本当に現れた。しかし、それはイスラエルの人にとっては待ちに待ち望んだ救い主が現れたということになりますけれども、それ以外の民族にとっては、そんなことは全然関わりのないことです。ましてや東洋人の我々にとっては、全く関わりのないことなんです。

ところが、その関わりのないお方があのベツレヘムに生まれ、ナザレでお育ちになり、それからしばらくは五人兄弟の長男としていろいろ生活の苦勞をなさりながら、やっと30歳前後になって世に現れて、三年間です、伝道は。たった三年の働きが、今に至るまで全世界に語りつがれているという。このことに、皆さん、驚かないとおかしいんですよ。

「聖書を読んで驚かなかつたら本当じゃない」

ということを私のお師匠の小池辰雄という方が言いました。

「聖書は驚倒驚嘆して読むべき書なり」

と。驚嘆驚倒、「ギョギョッ！」と（笑）。そのくらいのが聖書に記録されている。でも、それを本当に記録通りに、それを超えて受けとろうとおもったら、同じ霊をいただかないとダメなんです。

「人新たに生まれずば」

というのは、肉の誕生をしただけでは、神さまの次元はわかりません。それは人間は自分で変化できないから。

だから、イエスという方は向こうの世界から来た。しかも、お母さんのマリアさんは、

「聖霊によって身ごもった」

とあるでしょ。聖霊によって身ごもったなんて、そんなことは前代未聞のことです。しかし、聖霊によって身ごもられたというだけに、天が近いんです。

ちようど、「かぐや姫」は天から降つてきたから、満月になると、月を見て泣いていたというように、天が故里ふるさとなんです、キリストにとっては。だから、キリストが「父よ」と祈られたのは、ごくナチュラルです。ところが、我々、土から生まれた人間は、そんなナチュラルに天の次元を求めても——それは願望はあっても——それと同次元に生きるなんて全く不可能なことです。不可能なままだったら、私たちは土から生まれて土に還る単なる生



物の一種にすぎないわけです。ちよつと頭はよいかもしれませんが、悪知恵も働いているかもしれません。でも、そういう生物体として生まれた人間が、

「もうひとつ神のレベルの永遠の生命の世界を受けとらないでは承知せんよ」

といって、神さまの方がドーンと背中を押して行かしたのが、イエスという方なんです。そうでしょ。イエスという方は天の次元から降^{くだ}つてきてくれた。まさに降誕節です。

「彼は自分の国にきたのに、自分の国の人間はそれを拒絶した」

と、ヨハネ伝の始めに出てきます。神の思いと人間の思いがまるで天と地ぐらいに違っている。これはしょうがない。

生物体としての人間というのは、自己保存本能があるのは当たり前のことです。それをとにかく言う人はおかしい。生物体は自分を保存して、できるだけ長く生きて、そして子孫をのこしていく。これが使命なんです。でも、その繰り返しでは、神さまは満足しない。他の動物は知らんよ。でも、少なくとも人間は、

「人間は神の似姿に創られた」

と書いてあります。「神の似姿」ということは、

「霊的な存在者である」

ということですよ。肉体を宿としているけれども、その中に霊を住まわせてくださっている。その霊が天の神さまを慕う。我々は大体、永遠を慕う。

●青年時代の回心

青年時代はそうでしたよ。やはり、私は永遠というものが慕わしかったですよ。私は、地上の人間としては限りがあります。しかし、それではどうしても何か納得できない。

たとえば、愛し合うということを考えてみてください。どんなに愛し合ったって、死がすべて消してしまう。もしもキリストを知らなければ、もしも永遠の世界を知らなければ、どんなに二人が愛し合ったって、結局は、満足に地上の生涯を送っても100年そこで終わる。津波がきた、地震がきた、大災害があつたとなったら、一瞬にしてどこかへふっ飛んでしまう。そういう人間が、現実のなまの人間ですね。しかし、そういう現実のなまの人間が、それだけではないよと。

「あなた方は本当はもつと素晴らしい霊的な存在者なんだ」

と、そういう霊的な存在者として神さまは予定なさっているのに、そのことを知らないで、普通の生物体としての生涯を終わって、

「ジ・エンド、終わり。追悼しましょうなんて、それではいかん」

というのが神さまの呻きなんです。

「その呻きを聞いてほしい」

ということではないでしょうか。私はそう受けとっている。皆さん、この地上の生だけで



充分満足して、

「ええ、もうこれで結構です、それ以上はいりません」

なんて、思ってたらしやいますか？ 私はそう思っていたんですよ、そんな「永遠の生命」なんてとんでもないと。

「地上の生命を本当に私は生きたという実感があれば、もうそれでいい」

と思った。ところが、それが得られなかった、私は若いときに。うしろを振りかえったら後悔することばかり、自分を責めることばかり、将来のことを思うと不安ばかりなんです。自分だけではない。自分の家族、養っていく家庭、いろんなことを考えます。そうすると、大丈夫だという保証はどこにもない。キリストを知らなければ。そういう自分というものを思ったときに、ノホホンと気楽に生きている人が、不思議でなかったのが私の青春の思い出でした。その一番どん底の時にキリストを示していただいた。それで私の人生は変わった。本当に変わった。

一番どん底で行き詰まって、もうお先まっくらというときに、キリストの光を示してくれたのが、私を導いてくれた2年年上の方でした。その人が私にキリストを教えてくださいました。1956年の7月7日の夜、七夕の日でした。京都大学構内のあちらこちらを9時頃から12時過ぎまで、農学部、理学部のあたりを散歩しながら、彼はキリストのことを諄々と話してくれた。その時、彼が語っている顔が神々しく見えた。キリストをまだ私は知りません。けれども、この人をこんなふうには輝かしている、背後にいる方はどなただろうかと思った。それがキリストだったんです。そして、翌日7月8日の日曜日、あんな素晴らしい目覚めはなかった。それまでは、

「はあまた朝がきたか、またしんどい日が始まる」

という嘆きなんですよ、朝目覚めたら。寝ている間だけが安らかな幸せで、朝起きたらもうダメ。それがあの7月8日はちがった。またよく晴れてました。もう食事なんかすつとばして跳んで行きましたね。あれが私のいわば回心に、闇から光へという転換点になりました。まあ私の場合には、そうやって劇的な転換だったから、そのことは非常によく覚えているけれども、そこからの道のりはたやすくはなかった。そこからいろいろありました。そんなことを話したらもう切りがないから止めますけれども。

●人、新たに生まれずば

申したかったのは、

「人、新たに生まれずば」

ということ。クリスチャンになったからといって新たに生まれていないですよ。それは

「光を示してもらった、うれしいな」

という段階なんです。けれども、その肉なる人間、生まれながらの人間、それが霊なる人間、



キリストと同質の霊なる人間にチェンジしないといかん。神さまはそれを願っていらっしやる。それがここに、ニコデモとの対話の中で語られているので、もう一度見ていきましょう。ヨハネ伝3章3節から、

3 イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」⁴ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができるでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」

「へえ、歳とつた人間がもう一回、お母さんの中に入るんですか」

と。ニコデモというのはユダヤの指導者ですよ。そういうリーダー格のニコデモが、「新たに生まれる」という、この世の肉体の肉の命でなくて、天の生命、天の次元、それを全然体験もしていない、知識もないということがここでもよくわかりますね。

5 イエスはお答えになった。「はつきり言っておく。だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」

この「水」はきつと水の洗礼、悔い改めのバプテスマで、「霊」は聖霊のバプテスマを指しているんだと思います。

6 肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

これです。みんな肉から生まれているんです、当然、生物体として。でも、

「生物体として肉から生まれた人間が肉のままで終わったらダメだよ。もう一度新たに生まれるというのは、上から、天から、天の次元から新しい生命をもらわないと、それは神さまの次元とは縁結びができないよ」

ということですよ。

7 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。⁸風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

風を見てごらん。風はどこから来て、どこへ行くのかわからない。霊から生まれるというのもそんなものだ。今だったら、

「台風がフィリッピンのどこそこで生まれて、それが今どっちの方を向いて進んでいます」

なんてやりますけれども、当時は無理ですから。風は一体どこから来てどこへ行くのだろうかと。木の葉は揺れている。ヒューヒュー鳴っている。風が通っているというところはわかるけれども、風の出発点と着地点はわからない。

「霊から生まれる者もそんなものだよ」

と、キリストは言われた。そんなことは全然、普通はわからない。



⁹するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。
¹⁰イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。¹¹はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。¹²わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。¹³天から降って来た者、すなわち人の子のほかに、天に上った者はだれもない。

イエスはお答えになった。あんたはイスラエルの先生だろ。こんな初歩的なことがわからないの？ 自分は見たこと聞いたことを証している。天から来られた方ですから、地上のこともわかる、天上のこともわかる。でも、地上のことを話しても信じてくれないなら、天上のことを話しても、どうして信じてもらえるだろうか。天から降ってきた者即ち私の他には誰も天にのぼったものはいないと。

そうなんです。天から降ってきた方なんです。だから、天上のことは手にとるようにわかっているわけです。そこから来たんだから。それがまた地上に降ってきて、地のいろいろな人々の苦しみ、悩み、喜び、嘆き、それを全部味わわれた。

●「まぶねのなかに」（讃美歌121番）

それがさきほどの讃美歌121番の「まぶねのなかに」です。これは本当によくできた讃美歌です。キリストのご生涯をみごとに歌いあげています。最高の讃美歌に数えていい一つだと思えます。

1. 馬槽まぶねのなかに うぶごえあげ、
木工たくみの家に ひととなりて、
貧しきうれい、 生くるなやみ、
つぶさになめし この人を見よ。

皆さんは、大事に大事に産んでいただいて、生まれてきたら、おめでとうと、うぶゆをつかつて、至れりつくせりの用意ができあがっている。

ところが、このお方は宿屋がなかったと書いてある。だから、馬小屋の中で生まれた。馬槽の中にうぶごえをあげ、そして、育ちあがったら、五人兄弟の長男として、大工さんの仕事をやってこられた。貧しきうれい、生くるなやみを、全部体験しておられる。だからこそ、人々のことがわかるわけです。御殿の中に住んでいた人間がヒョロヒョロと出てきたのでは、庶民のことはわからない。わかれといったって無理ですよ。でも、この方は生まれがもうそうやって馬槽の中に生まれたという、一番どん底の生まれ方をしているわけです。それも、カイザル・アウグストのときに、世界の救い主、世の救い主である方がどん底の生まれ方カイザル・アウグストのときに、世界の救い主、世の救い主である方がどん底の生まれ方



をしているという、この天と地のコントラスト、それだけでも凄いことです。だから、

「貧しきうれい、生きるなやみ、つぶさになめし、この人を見よ」

という。2節、

2. 食するひまも うちわすれて、

しいたげられし ひとをたずね、

友なきものの 友となりて、

こころくだきし この人を見よ。

この地上でいろいろ悩んでいる人、苦しんでいる人、孤独な人、家族を失った人、愛する人を失った人、そういう人たちはこのイエスのところに来たら、2節に書いてあるとおりだと。友なきものの友となつて、心くだいて、いたわつてくださる、このお方を見よと。讃美歌312番という、結婚式でよく歌われる「いつくしみふかき」がまたキリストのことをよく歌いあげている、慰め深い讃美歌ですね。

私は次の3節はまともに歌えないんですよ。

3. すべてのものを あたえしすえ、

死のほかなにも むくいられで、

十字架のうえに あげられつつ、

敵をゆるしし この人を見よ。

すべてのものを与えしすえ、何が報いられたか。死ですよ。十字架上の死です。こんなことがあつていいのかと。人のために心をくだき、いろんな人をいやし救いあげ、イエスのなさったことでケチをつけなければいかんことは何もないと思う。一般人にとつて、普通人にとつて。ところが、民衆は当時の宗教権力者たちにまどわされて、そそのかされて、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ。バラバをゆるせ!」

と言つて、とうとう救い主を十字架につけて殺してしまった。しかも、そのお方は十字架上で何と仰つたか。

「彼らはわきまえのない子どもたちです。父よ、彼らをゆるしてやってください

い」

と。そうやって執り成して祈られた。そして最後は、

「わが霊を御手にゆだねます」

といつて息を引きとられたと書いてます。だからここに、

「すべてのものを与えしすえ、死のほかなにも報いられなかった。しかも、十字架のうえにあげられながら、彼らをゆるしてやってください」と

「敵」というのは、自分たちに敵対している、そういう敵対勢力プラス、それに煽動されてワーワー言っている民衆たち。それを全部ゆるされた。こんな人が一体世の中にあるんですか。そして4節、



4. この人を見よ、この人にぞ、

こよなき愛は あらわれたる、

この人を見よ、 この人こそ、

人となりたる 活ける神なれ。

この人を見よ、この人にぞ、神の愛、こよなき愛はあらわれた。この人を見てごらん、この人こそ活き神さま、人となった活ける神ではないか、他にどこにそういう方がいらつしやるのかと。これは日本人の由木康さんゆうきという方の作詞なんです。本当に素晴らしいからこれを一番先に歌っていただいたんですけれども。

●天への橋渡し

それがさきほどのヨハネ伝の3章でいいますと、

「肉から生まれたものは肉である。ところが、霊から生まれたものは霊である」

と。新しく生まれるというのは、天から上から生まれる。肉なる人間として、生まれながらの姿でいる人間は、そのままでは天上の世界には行けない。霊の誕生をしないと、霊の次元には入れない。でも、誰もできない。だから、キリストがその橋渡しをする。そうやって、天への道となつてくださる。

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり。我によらでは誰にても父の御許みもとに至るものなし」

と、ちゃんとヨハネ伝で言っておられる。ところが、天への橋渡しをしてくれたキリストの道をみんながスタスタと安らかに歩いていく、それだけで終われば、めでたしめでたしですけれども、そうはいかなった。十字架というのが待っていた。

だから、どこの教会の屋根の上にも十字架が付いています。十字架の首飾りをつけていらつしやる方もある。十字架というのは凄いことなんです。いろんな宗教があるかもしれないけれども、十字架を一番正面にすえているのはキリスト教だけではないでしょうか。私は十字架というのは、神さまがなさつてくださった最大の奇跡だと思います。それは乙女マリヤからキリストが生まれたのも奇跡でしょう。その他、いろんな奇跡が旧約をみても出てますよ。けれども、私は神さまのなさった最大の奇跡は十字架だと思います。なぜならば、十字架は、過去のイスラエルだけではない、過去の全人類それから現在の全人類そして未来永劫の全人類、それを全部引き受けているのが十字架なんです。

「いや、そんなものがあるものか」

と蹴飛ばす方は蹴飛ばしたらいい。けれども、それなしには救われっこない。自分の善だとか、美德だとか、いろんな悟りだとか、そんなもので神の次元に行けるはずがないです、人間は。

「我は道なり、真理なり、生命なり」



といって、自分自身が神への道となった。しかも、その道をみんなスタスタと大手をふって行けるかというと、そうではない。罪なる人間が、欲と穢れとかにまみれたような人間が、神さまに敵対している人間が、そのまま神さまの前に出られるはずがないでしょ。「来い」と言われたって、行けませんよ、そんなもの。醜^{みにく}くて恥^はずかしくて。光と闇は関わりないです。

●光と闇

いま、「闇^{やみ}」と申しましたね。皆さん、「闇」とは何か知ってますか。光が無い状態を闇というんです。闇という実在があるんじゃない。私はそう思っています。光がなくなったら、闇なわけです。闇を見せてくれといったら、光を消さなくてはいいかん。闇だけをつくりだすことはできないじゃないですか。これは私の新発見。

そう考えたら、「死」とは何ですか。人間は本来、生きている生命が本来なんです。生命が消えている姿が死なんです。死というものを何か実在するように思ったら、これは間違いではないでしょうか。光がなくなっている世界が闇。生命がなくなっている世界が死。つまり、神さまは光とか生命とか、プラスのものばかりをプロデュース（産出、生産、創出）してくださいなんです。それが失われたところが闇であり、死であり、地獄である。

「アーメン、その通り。これはノーベル賞級です」

と、私だけが思っている。冗談じゃないけれども（笑）。皆さん、本当にそうではありませんか。

「悟りを開け」

とは、キリストは言わなかった。

「私を信ぜよ」

と言われた。「信ずる」というのは、頭で信ずるのではない。

「受けとれ、私と一つになれ」

ということ。

「我をくらえ、我を飲め。私を食べて、私と一つになろう」

「私は生命のパンである。モーセが与えたあのマナを食べたけれども、みな死んでしまった。しかし、私という生命のパンを食べる者は永遠に死なない。

だから、私を食べる、私を飲め」

と、ヨハネ伝6章のところでさっさん言っておられる。6章63節、64節では、

「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない」

と言っておられる。人を活かすものは霊。それに対して肉は役立たない。その霊と肉との対比です。肉というのは、生まれながらの人間がもっている姿、ヒューマンネイチャー（人間の自然性、人間性）です。それに対して、霊というのは神さまからだけ流れてくる、すごい



う生命です。生命の何かそういう実体だと思います。人を生かすものはその次元のものという。

「人を生かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言葉は霊であり、生命である」

と。ヨハネ伝6章63節、あとで確かめてください。そのように、キリストが地上に生まれて、この世にもたらそうとなさつたのは、地上のレベルの幸せではない。それは、地上のレベルの幸せでいるのも結構ですよ。けれども、人間は土から生まれて土にかえる。それで終わりというようなものではない。天の次元の永遠の生命で生きる。神と共に生きる。それが人間本来の在り方だ。ところが、それがもう失われてしまっている。地上をみたら闇だ、光がないと。だから、

「まことの光ありて、世にきたれり」

とヨハネ伝にあります。光とか生命とか、そういうものは全部、天からくだってくる。善きものは全部、天からくだってくるんです。我々はそれをお受けするだけです、

「はい、ありがとうございます」

と。けれども、

「いや、私は受ける資格がありません。私はけがれています」

とか、そういう「私は、私は、私は」と抵抗したら、それは仕方がないんですね、そういう人に対しては。謙虚にみえているけれども、それは傲慢なんです。せっかく神さまが、

「プレゼントだ。黙って受けとつてくれ」

といつて差し出しておられるのに、

「私は受ける資格がありません。私はもうちよつとまともな人間になつたらお受けします」

というのは、自分を立てているわけでしょ。「自分を立てる」ということが「罪」なんですよ。この世の人は、罪をどう考えているか知らんけれども、聖書がいつている罪というのは、神さまをさておいて、自分を立てている姿なんです。これを小池辰雄は、「自我」といいました。

「我に執^とらわれていることが罪だ」

という。これは東洋的な捉^{とら}え方ですね。ヨーロッパでは、罪といったら、何か変なことをやった、変なことを思つたとかいう、そういう人間の思いとか行為の方に捉えまますけれども、小池辰雄は、

「人間の在り方そのものがエゴイストだ。自己保存で神さまを蹴飛ばしているのが罪だ」

という。キリストは、

「父よ、あなたの御意^{みこころ}を成させたまえ」



と。キリストは天から生まれた方だから、神さまが第一なんです。

「まず神の国と神の義を求めよ」

と言われた。あの方にとつては、向こうが当然の本来の永遠の世界で、それが地において来ているんですからね。そして、

「御意の天に成る如く地にも成りますように」

と。全部、天において成っている事態を、

「どうぞ、地にもたらししてください。その為に必要なら私は十字架にかかって犠牲になりますから」

というのが十字架の贖いでしょ。だから、

「そのキリストをさておいてどこに生命があるんですか。どこに本当の希望があるんですか」

と、私は聞きたい。

●自分の逝く先をまず確保して

ご高齢の方がだんだん増えてきますね、日本も。私もその中のひとりですけども。でも、高齢者にいかなる希望があるんですか。高齢者は、この世の生命が終わったときに、どこへ行らっしゃるんですか。皆さん、お墓のこととか何かそんなことを心配なさるけれども、そんな地上のお墓を心配するよりも、自分の逝き先をまず確保して予約しておかないと、予約席をしておかないと、ダメでしょ。それはあまりなさらないですね。だから、クリスマスチャンが模範を示さないといけない。

地上の生命は仮に100年としますと、私はあと13年もある（笑）。大したものです。120歳としたら、33年もあります。これは大変だ。

皆さん、もう高齢になれば、いつ終わりが来たって何も不思議ではない。よく、いろんな災害でひどい目にあったり、ひどいことがあると、

「神も仏もあるものか」

と言う人がある。私はその人に聞きたい、

「あんたは、神も仏も大事にしてきたか？」

と言いたい。そんな連中にかぎって、今までは「神も仏もあるものか」といつて勝手なことをやっていながら、何か大災害とかそういうことが起きると、「神も仏もあるものか」なんて言う。世の中、そういう意味で腹のたつことが多いですね。「神も仏もあるものか」なんてなことを平気な顔して言うやつの顔をみたら、

「お前は神も仏も大事にしてきたのか？」

と聞きたくなるんですよ。



●十字架は最大の奇跡

¹⁴そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

モーセが荒野で蛇を挙げた。これは民数紀略（21・8）に出てきますから、またお調べください。青銅の蛇をかかげて、これを仰ぎ見た者は救われるという。これを仰ぎ見たらみんな癒された。でも、

「そんなバカなことがあるか」

といって信じなかった者はみんな死んでいったという故事があります。

しかも、蛇は呪いの象徴なんです。呪われるんです。呪われたる存在を仰ぎ見て癒されるなんて、不合理きわまりない。しかし、それを素直に受けとった者が癒された。キリストは、

「私はモーセのあの蛇の姿になる」

ということを言っておられる。自分は呪われる。その呪いというのは何か。我々の罪や汚れやマイナスを全部ひつかぶっている。そして審判の対象となる。それが呪いでしょ。それをキリストは黙って受けとってくれたんです。しかも、

「十字架は最大の奇跡だ」

と申しますのは、十字架というのは過去のイスラエル民族だけではない、過去の全人類、それから現代の全人類、そして、未来永劫にわたる全人類、それを全部ひつかぶっているのが十字架なんです。だから、

「十字架は神さまが人間にプレゼントしてくださった最大の奇跡、最大の恵みです」

と、こう申し上げたいと思います。どんな嘆きも、痛みも、苦しみも、悔い改めも、後悔も、全部、十字架で消されている。十字架は、過去・現在・未来、永劫に片づけてくれている。光輝く生命の世界へ連れ込んでくれている。そういう生命の世界、これが十字架なんです。その十字架を背負ったのがキリストなんです。イエスなんです。

●この火既に燃えたらんには

イエスがルカ伝12章のところで言っている呻きがある。

「⁴⁹我は火を投ぜんとて地に來たれり。

と。火です、聖霊の火です。

この火既に燃えたらんには我また何をか望まん（何をか要せん）。⁵⁰されど、我には受くべきバプテスマあり」（ルカ12・49～50）

これは血のバプテスマですよ。

「この地上に、神の生命、聖霊という新しい霊を持ってきて、人々をみんな生まれ変わらせて、神の子に変貌させるためには、どうしても私は血のバプテ



スマ、十字架を通らなければならない」

と。それはわかつている、もう迫ってきているんです。

「それが成し遂げられるまでは、思い迫ることいかばかりぞや」

と言っておられる。それから次に一転して、

「⁵¹私は地に平和をもたらすために来たと思うな。争いだ。⁵²一家の中に五人いて、二人がクリスチャンになったら、そうでない三人との間に衝突が起こる」

（ルカ12・51～52）

と。これは日本の家庭はみなそうです。ヨーロッパはキリスト教国ですから、生まれながらにしてキリスト教の家に生まれたというところで、トラブルはないけれども、日本で一人クリスチャンが生まれますと、そこで必ずトラブルが起こる。それが若いお嫁さんなんかだと気の毒ですよ。仏壇を拝め、仏式に従ってこれこれの行事をせよと迫られる。本当に気の毒な若いそういったお嫁さんたちのことを私は聞いたり見たりしましたけれども。本ものがやってくると、そこに波瀾が起こる。しかし、それを突き抜けないと、本当の世界に入れない。だから、

「キリストを信じたら、楽になる」

とは、どこにも書いてませんよ、福音書では。

「誰でも私に従ってきたいと思う者は、日々おのれを棄て、おのが十字架を負いて我に従え」

と言われた。

「おのが生命を愛する者、惜しむ者は生命を失い、わがため福音のために生命を棄ててかかる者こそが本当の永遠の生命にあずかる」

と。キリストが山上の変貌をとげられるその直前に十字架を言っておられる。しかも、自分の十字架を仰るだけでなく、

「私の弟子となる者はみんなその角度で来い」

ということをおられる。

「はい、喜んで行きます」

というのがクリスチャンではないですか。パウロのピリピ書をみても、

「わが生きるはキリスト、死ぬるもまた益なり」

と言ってますよ。とにかく、自分はもう、

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや我生きるにあらず。復活されたキリストが、聖霊の姿のキリストが私の中で生きておられる。私を新しくプロデュースしてください。我いま肉体にありて生きるは、わがために己が身を棄て給いしこのイエス・キリストにすがりついて生きている。このお方の死を無駄にしたくない」



と。その当時は、律法による永遠の生命なんて言われたから、もしそれなら、キリストは無駄死になさったことになるではないかと。

「絶対にキリストを無駄死にさせたくない」

と、パウロが叫んだのはガラテヤ書2章20節ですよ。ああいうところを本当のクリスチャンは、

「はい、その通りです。私はその通りいきます」

ということを書かないといけない。示さないといけないんです。

今のキリスト教界が、どんなふうに十字架を受けとっているか、聖書を受けとっているか、私は知りませんが、少なくとも私は、このキリスト召団というのはそのようにキリストをリアル（現実、実在、本物、本当、真実、あるがまま）に生きている。霊なるキリスト、御霊のキリストと一緒にあって、キリストの歩まれたように生きていく。いわゆる幸福主義ではない。でも、そうやって生きているときに、

「幸せだなあ」

ということを本当に思うんですよ。皆さん、そうではありませんか？ ちゃんと将来が保証されているんですよ。

●あなたの逝き先は予約されていますか？

あなたの逝き先はちゃんともう予約席が定まっていますよ、先に行った人がみんな待っていますよ。あなたが来たら、拍手して迎えますよ、

「ようやった」

と言って。そのときに、地上で「ようやった」と言われんような人は小さくなって行かなければならん。皆さん、小さくならんで、でっかい声で——ラグビーの選手たちみたいに——凱歌をあげて向こうへ行く。それがこの世でキリストに先に出会った方々の生き方なんです。そうしたら、他の人も、

「ああ、あんな生き方もええなあ、歳とればとるほど輝いてるやんか」

と。そうでしょ。「あんなのいいなあ」と。それが証人^{あかしびと}でしょ。さつきから言いました証人というのは、見えないものを見えるものが表していくんです。見えない事柄を、

「こうでした、ああでした」

と。事件当日に目撃者が誰もいない。「あつ、私が目撃者です。あんなふうに、こんなふうに起こりました」「ああ、そうか」といつて、よくありますやん。

それと一緒に、生命とか何だとかという見えない事態——天国も見えませんが、すべては見えませんが——見えないものを、いかにも見えるがごとくに、その人が生活そのものをもって、その人の在り方そのものをもって、表していく。

「汝らは世の光なり。汝らは地の塩なり」



と、キリストは言われた。だから、キリストがいろんな福音書で語っておられることは全部私たちに、

「お前たちはその通りになるんだよ。私がそうしてあげるからね」

と。読み直していただきたいんですよ、二千年前に語られたキリストの言葉を。しかも、キリストの十字架前ですよ。これからのことを言っておられるんです。でも、我々はもうそれから二千年経ってしまっているんですよ。キリストが甦られた事態、そしてキリストが天に昇られた事態、ペンテコステの聖霊となつて、火の玉となつて降つてこられた事態、そして、弟子たちはそれで励まされて地中海伝道をやった。ああいったことは全部この新約聖書で、目の当たりそれを受けとることができるわけです。こういうものを受けとった人間が変化しなかったらおかしいんです。

青酸カリを飲んだらみな死ぬそうですね。私はまだ飲んでませんけれども（笑）。試してみようと思つても、試したらあかんのですよ。つまり、申し上げたいことは、聖書というのはそういう活ける生命の言葉なんです。食べたものは変化する。青酸カリは死にますよ。聖書は生命の言葉なんです。その人を生命づけて、今までの過去のその人とは違うものにどんどん創り変えていく。20年やつてきた人は、20年前とまるで別人になつていなければ、おかしい。しかも、日々に新たなんです、この御言は。絶対に飽きがこない。新しい発見がいっぱい出てくる。

●私の十字架は無駄死にか

皆さん、そんなふう^ににこの新約聖書をお読みになつていらつしゃいますか？

「旧約聖書から全部読め」

とは、私はおすす^めしません。旧約聖書のポイントはつかまえていくのは大事ですけども。あれはイスラエル民族の歴史、民族史ですから、そこまでは我々は要求されていないと思います。けれども、旧約聖書はキリストを預言^{あかし}している。キリストは、

「聖書は我につきて証^{あかし}するものなり」

と言われた。大事なところは集会でお話します。けれども、一般には新約聖書です。それとよく詩篇がくっついていきます。詩篇は祈りと讃美の書です。これを祈りの友にする。祈りの導き手、誘い水にする。したら、祈りが楽になります。要するに、この新約聖書は、福音書はキリストのことを語ってくれている。それからローマ書以下は、キリストに導かれたパウロとか、ペテロとか、ヨハネとか、弟子たちが、

「本当にキリストにある生き方とはこんなものだ、キリストにある者の希望という

のはこんなものだ。キリストのもたらされた愛というものはこんな凄いものだ」

と、そういうことを命懸けで証言してくれたものです。彼らはみんな殉教したでしょ。つまり、命懸けで告白してくれたのがこの新約聖書となつて遺^{のこ}された。これは最大の遺産だ



と私は思います。いろんな遺産がありますね、世界遺産が。聖書を世界遺産だと言ってくれないんですか。聖書は本当にそういう意味の神さまからのプレゼントです。そして、皆さん一人ひとりが、生き字引、生きた聖書になるということ、それが証人^{あかしびと}です。そういう形で次の世代へ伝えていく。この役割が、皆さんお一人おひとりに課されている仕事です。そう思いになりませんか、本当に。

「我をくらえ、我を飲め」

とキリストは言われた。

「私と一つになれ」

と言われた。キリストは願っておられるんです、

「お前と一つになりたい。お前の中に入りたいんだよ」

と仰る。けれども、

「いや、あきまへん」

「なんでか？」

「罪がおまんねん。私、自我が強すぎてあきまへん」

「何を言っているか。十字架をどうしてくれるんだ。全部、十字架で私が片づけたのではなかったのか。あんた、十字架をどう思っているの。十字架は無駄死にか、

私は十字架で犬死にしたのか」

と、キリストは言われますよ。

「私なんかまだまだ。私なんかんだかんだ」

というのは全部、十字架を否定していることになるんですよ。十字架はそれら一切を吹き飛ばして、台風一過きれいになった。十字架できれいに掃除された。放っておけば、悪霊がきますわ。悪霊をこきせてはいけません。十字架で本当に私は、

「われ主と共に十字架せられたり」

と言って、

「ああ、きれいにしていただきました。さあ、聖霊のイエスさま、聖霊のキリスト

さま、私の中に宿って、私と一緒に歩んでください」

と。エマオ途上の二人は第三の旅人と語りながら、いつしか彼らのうちに

「霊が燃えた」

と言っていました。

「あつ、キリストだ」

と。パンを裂かれる姿を見て、キリストだと思った瞬間にもう見えなくなった。それで彼らは急いで弟子たちの所へまた戻って行った。そして、そこにキリストが居られたという。ああいう話というのは本当の本当の話だと私は思っています。見えない世界をああいう形で見えるようになさっている。本当に恵みではないですか。見えないものは霊の眼でしか



本来、見られないはずなのに。パウロは「第三の天」まで引き上げられて、そういう世界を見せられて、本当に驚いた。パウロは傲慢にならないために、刺を与えられた。

「その刺^{とげ}を除けてくれ」

と願ったけれども、

「わが恵み、汝に足れり」

と言われたと、コリント書に書かれているでしょ。

●私は天国人です

だから、パウロの書いていることも全部、リアリティ（現実、真実性、事実、本質）の世界を書いている。リアリティの本当の实在界です。それに比べて、この世は現象界です。現象界というのは必ず消えていく。永遠ではない。我々は永遠でない世界に生まれたんです。

しかしながら、永遠界に変貌するように、そこへ生まれ変わるようにといつて、キリストを遣^{つか}わせてくださった。神さまの愛は、そういう形で我々に顕れているんですよ。それをクリスチャンが本当に受けとつて、

「本当にそうでした」

と言わなかったら、誰が信じてくれるのかと、

「余命幾ばくもない私はそう叫びます」

と言いたいけれども――まだまだ余命がありますからね（笑）、そう簡単にいきませんけれども――でも、皆さん、そのぐらいの思いで、本気になって欲しい。世のクリスチャンたちが本気でキリストを生きなくては。

私は今年の始めのスローガンに、

「聖書を生きる、キリストを生きる」

と書いた。そして、更に実践として、

「二人をキリストに導く。一人にキリストを伝える」

と、それを私の願いとして書きました。さあ、それが実現したかどうか、これはわかりません。実現してないのかもしれない。クリスチャンになっていた人を変貌させたことはありません、何人か。でも、初めてキリストに導いた方ではなかった。だから、どうもあまり、この一年で私に触れて初めてキリストを知つて、うれしいと言った人はまだいないんです。要するに、皆さん、「キリストに触れる」ということは、キリストが捕まえたんです。

「汝ら我を選びしにあらず。我汝らを選びたり」

と、キリストは弟子たちに言われた。

「それはあなた方が行つて、実を結び、その実が豊かに残るためである」

と、キリストがプッシュしているんですよ。人間の力なんて知れてますよ。そんなこと言つたら、オリンピックの選手なんかは怒るかも知りませんけどね。新記録を出したとか何



とかと、それはまあ結構なんだけれども。我々は神さまの眼からみて、

「本当にお前はよくやったよ」

といって、向こうへ行つたときに喜んでいただくような在り方をしたい。皆さん、そう思われませんか？

この中にいらつしやる方で、あと50年生きているという保証のある方はありますか。70歳の人であと50年といったら120歳。70を越えている方だったら120を越えてしまう。それはない。まあそれはいいけれども、要するに、我々の地上の生命というのは有限です。有限なる生命、それで終わらせない。有限なる生命、消えゆく生命、土にかえる生命で生まれた。でも、神さまは新しい誕生をさせる。さっきのニコデモに対して、

「新たに生まれなければ、上から生まれなければ、神の国を見ることも、神の

国に入ることもできない」

と言われた。これを、皆さんお一人おひとりが本当に味わって、

「私は天国人です」

と言えなくては。この新たに生まれた者を「天国人」と呼びたいと思います。私は今までただの地上人でした。けれども、地上人でありながら天国人の質をいただきました。二重国籍ですと。そうでしょ。地上では、国籍は私は日本です。それぞれ国籍があるでしょう。でも、クリスチャンは、

「わが国籍は天にあり」

とピリピ書3章に書いてあります。クリスチャンは、肉体をもつて地上を宿としていながら同時に、天の国籍、天国籍をいただいた天国人である。それを表に出して、皆さんも天国人になってくださいねと。天国人になるのに何が必要ですか。お金ですか、そうじゃありません。修行ですか、そうじゃありません。では何ですか。

「イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」

とパウロが言いましたよね。キリストが全部、備えをしてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは父のみもとに至る者なし」

とキリストは言われた。

「人を生かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言は霊であり、生命である」

と。本当にヨハネ伝を読んだら非常にハッキリしています。ルカ伝もところどころ出てきますけれども。



●永遠の生命、霊と肉

ヨハネ伝の主題はまさに、一つは「永遠の生命」が主題です。それからもう一つは「霊と肉」。生まれながらの人間は「肉」なんです。これは土から生まれたら土にかえる。ところが、人間は同時に霊的な存在者であらねばならない。それは新たに生まれなければならぬんです。自分で生まれることができない。だから、キリストが、新たに生まれる道となつてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらずば、誰にても父の御許に、天国に、天の世界に行くことができない」

と、当たり前のことを仰つたんです。

「天から来た者のほかは誰も天のことを知らない」

とも、ヨハネ伝で言っておられます。

「自分は見たこと聞いたことを証しているのに、誰も信じてくれない」

と。だから、キリストが天界から、別次元の霊界、天国界、天上界から地に降りてきてくださったということを受け入れて、

「あつ、そうなんだ。この人は、マリヤさんの系統からするとこの世の人として、『貧しき憂い生くる悩みつぶさになめし』と、そういうお方でありながら、天上からくだってきた人なんだ」

と。キリストは霊において霊の姿で、天と地との間を行ったり来たりなさっている。だから、天上のことはナチュラル（天然、自然に）に語っておられる。ところが、世の人からみたら、全然あわないんですよ。あわないから彼を迫害するとか、攻撃するとか、時には、気が狂つているとかいう。イエスの兄弟たちもイエスを取り押さえようとしたと書いてあります。そのくらい、天の次元とこの地の次元とのギャップは大きい。そのギャップを埋めようとして、キリストは苦勞してくださった。そして、

「我は道なり、真理なり、生命なり。あなた方の疑いも何もかも全部、十字架で片づけた。十字架で大掃除した。そこは、台風一過のようにきれいに、本当に備えはできた」

と言われる。

「備えは終われり、いざ来たりたまえ」

という聖歌（623）がありますね。あのように、我々は自分で掃除できない。掃除できない自分に代わって、イエスが十字架で、

「あなたの今までのマイナスは全部きれいに片づけた。さあ、早く聖霊を受けなさい。神の霊を受けなさい。でないと、変な霊がきたらとんでもないことになるから。

聖霊を祈り待つてなさい」

と言われたでしょ。彼らは祈り待つていたら、五旬節に――復活されてから五十日目、天



に昇られてから十日目に――聖霊が火のように降ってきた。そこからキリスト教会は始まった。現代キリスト教界がそれを本気で受けとっているか。聖霊の火が燃えているか。聖霊の火は愛の火なんです。キリストが命懸けで人を愛されたように、人を愛さずにはいられないという、そういう愛の霊なんですよ。愛の霊をいただいた者は愛の人にならざるをえないんです。

そしてもう、死というものは完全に乗り越えてしまっている。キリストはそれ以外のものをくれようとはしていませんよ。キリストは、我々が望んでも自分では獲得できないものを持つてきた。しかもそれはプレゼントです。引き換えるような対価はないんです。一億円積もうと、百億円積もうと、そんなものは引き換えにならない。引き換えにならないなら、もらえないのかというと、

「いや、黙って受けとつてくれ。プレゼントだよ、黙って受けとつてくれ」

と。私なんかは、

「はい、ありがとうございます」

と受けとつたんですよ。でも、誇り高き人は、

「そんなタダのものはいらんわ。金を払ってなら、対価を払ってなら、受けとつて

やってもいい」

と。これが知識人の傲慢ですわ。まあ知識人といって申し訳ないけれども、お金持ちにせよ何にせよ、この世のことで満ち足りている人は拒みます。だから、

「渴ける者、われにきたれ。金なく価なくしてこの水を飲め。善きもので神は

満たしてくださるから」

と、イザヤ書55章に出ています。

我々が願ってもどうにもならないような、そういう本当のものをキリストは携えて天から降ってきてくださった。キリストはご自分自身をプレゼントとして差し出してください。そして、キリストに本来宿るべきすべての善きものが一人ひとりの中に宿る。

「われ生くれば汝も生くべければなり」

と、ヨハネ伝14章にありますように。

「あなた方を孤児にはしない。私は帰ってくる」

と出てきてます。そのようにして、なんとイエスという方は素晴らしいお方なんだろうと。さっきの由木康さんの讃美歌の通りですよ。

3. すべてのものを あたえしすえ、

死のほかかなにも むくいられで、

十字架のうえに あげられつつ、

敵をゆるしし この人を見よ。

と。



●イエスとニコデモとの対話

このプリントの方にちよつと戻っていただきましたしょう。

《ヨハネ伝3章の「イエスとニコデモとの対話」において示されているように、生まれながらのままの人間（「肉」なる存在）は、新しく「天の次元（「霊」の生命^{いのち}）を頂かないと、肉体の生命の終りである「死」でもって終ってしまふ。

天界（神の実在界）より降臨したイエスは、「死」をもつて終らない「霊的生命」（永遠の生命）を与えようとして不思議な業（奇跡）と権威ある言葉（霊言）をもつて「神の愛」を示し、「神の国」（永遠界・実在界）を体現した。しかし、当時の宗教的敵対者の陰謀と、それに扇動された民衆によつて、十字架刑という残酷極まりない刑を受け、命を奪われた。

祈ればまばゆい姿に変貌し、直ちに天界に入るにふさわしいイエスが、その十字架の死において「人々（我々人間）の罪」（神に対する反逆・自己中心なる罪）を背負つたのであつた。贖罪の大業を果たしたイエスは、まばゆい栄光の姿で顕現した。これを人は復活と呼んでいる。それはイエスの本質が顕れただけなんです。

イエスは、ユダヤ民族のみならず、全人類の過去および現在並びに将来の全人類の罪過を一身に背負つて「贖罪の大業」を果たしたのであつた。

なんと十字架というのは凄いか。神さまが人間にプレゼントしてくださった最大の奇跡は十字架だと、私は申し上げたいんです。そこで全人類の過去・現在・未来が担われている。未来永劫に担われている。

これを受け入れるか、拒むかは、人それぞれの自由に委ねられている。ヨハネ伝

3章16節～21節は、そのことを宣言している。

16 神は、その独り子^{ひとりご}をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によつて世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 惡を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかにするために。

今読み上げました、3章16節～21節において、イエス・キリストの十字架、イエス・キリストという霊的人格、そのお方を受けとるか受けとらないか、これは人々それぞれの自由ゆだねられていることが書かれています。

更に付言するならば、天界に在り給う「靈なるイエス（みたまのキリスト）」は、今



もなお、「御名を呼び求める者」の傍近く臨在^{そば}してくださり、慰め、励まし、力づけ、導いてくださる「救い主・助け主・導きの主」である。』

クリスマスチャンというのは、これをそのまま

「その通りです！」

と言っている人間だと思ふんです。天界にありたもう霊なるキリスト、御霊のキリストが今も、御名を呼ぶ一人ひとりの中に――そばに居てくださるだけでない――中に宿ってくださる。

「十字架でお前を片づけたのだから、あんたは潔いんだ。だから、私はお前の中に入りたいよ」

と宿ってくださる。そして、慰め、励まし、力付け、導いてくださる。まさに救い主、助け主、導き主、これが私にとつてのイエス・キリストさまなんです。

イエスの言と行いから三か所引きました。これはまたあとで、よく味わっていただきたいと思います。三つあげました。一つは「癒し」です。福音書を読んだら、あらゆるところに癒しが出てますでしょ。だから、癒しということは大事だということ。それから二番目は「慰め」です。三番目は――癒して慰められるだけではない――「復活して顕現した」ということ、これがまた大事ですね。死につばなしではない。人間は死んだらお終いではないよと。永遠の生命とはこういうものだということを実証された。ですから、この「癒し」、「慰め」、「復活して顕現したイエス」、これが福音書の中の最も大事な事柄ではないだろうかと思つて、あげました。

●癒し

《1癒し》

百人隊長の僕を癒す（マタイ伝8章5～13節、ルカ伝7章1～10節）

やもめの息子を生き返らせる（ルカ伝7章11～17節）

ラザロを生き返らせる（ヨハネ伝11章1～44節）

ヤイロの娘を生き返らせる（マルコ伝5章21～43節、ルカ伝8章40～56節）

「癒し」についていうならば、ここに引きました、「百人隊長の僕の癒し」です。百人隊長は、

「あなたは宇宙の王であります。私はローマの皇帝の権威を持っていますから、部下に『行け』といえは行きます。『来い』といえは来ます。あなたは宇宙の神さまの権威をいただいているから、わざわざ僕を癒しに家に来てくださる必要はありません。『癒えよ』と一言仰れば、それでも僕癒えます」

と言った。

「イエスは驚かれた」

と書いてある。



「いまだイスラエルにこんな素晴らしい信仰を見たことがない」

と。イエスというお方は非常に偏見のない方です。憎くきローマの支配下にあるわけですよ。そのローマの軍人でしょ。そのローマの軍人が自分の部下の苦しみを、

「何とかイエスさま、助けてください」

と願っている。その姿も素晴らしいけれども、

「御言を下されば充分です。家にまで来て下さる必要はありません」

と言った。

「そんな信仰はイスラエルでは見たことがない」

とイエスは言われたんですよ。いかに、眼鏡でみておられないか。「この民族はいかん。こいつはどうだ」とか、そういう先入観がないわけですね。その百人隊長のそういう姿にイエスはうたれた。それがひとつ。

それから、二番目は、やもめの息子を生き返らせた。これも素晴らしいところです。あとでここを引いてください。このやもめは、ご主人に死なれて、一人息子だけが生きる頼りだったんです。ところが、この息子は死んでしまった。そのお葬式で柩が担ぎだされてきた。みな、泣いているわけです。それにイエスは立ち会って、柩を止められて、

「泣くな。若者よ、出てこい！」

と言ったら、出て来たという。もうどんなに人々が驚いたかということが書いてますよ。そういう絶望的な婦人に対して本当の希望を——言葉だけではない——事実をもって現している。これがイエスのお姿ですね。

それから、有名なラザロの復活もそうでしょ。ラザロは墓に葬られて四日も経っているんですよ。

「ラザロよ、出てこい！」

と言われたら、ラザロは出てきたという。

それから次のヤイロの娘、これも素晴らしいところですね。会堂司ヤイロがイエスに、

「娘が死にかかっています」

と言った。ある福音書では、

「娘は死にました。でも、あなたが来てくだされば、娘はきっと助かります」

という。しかし、私は、「死にかかっています」という方が本当だと思う。というのは、そこでイエスは

「では、行こう」

と行って行かれたら、途中で血漏を患っている女が衣の裾に触って、癒されることが起こって、少しそこで時間をとられた。すると、家の者がやってきて、

「娘さんはお亡くなりになりました。もう今さら来ていただいても無駄です」

と言う。それに対して、



「信じなさい。信じつづけなさい」

と、イエスは励まして行かれた。娘は死んでしまつて、みんなが泣いたりワイワイやつて
いる。両親だけを連れて二階にあがつて、

「タリタ、クミ！（少女よ、起きよ！）」

と、その一言で少女は起き上がった。少女は12歳だった。ああいう話は本当に受けとつて
くださいね。

「タリタ、クミ！」と、この御言が臨んできたら、どんな絶望的状况であろうと、行き詰
まろうと、我々は変貌する。その種は自分の中にはないですよ。イエスが「タリタ、クミ！」
と、一人ひとりに呼びかけていらつしやる。その御言が一切を引っくり返してしまう。そ
ういうお話として私は受けとつています。それが癒しですね。

● 慰め

それから、二番目の「慰め」。慰め深いですよ、福音書は。

《2 慰め

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す」

（マタイ伝9章9～13節、マルコ伝2章13～17節、ルカ伝5章27～32節）

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません」

（マタイ伝11章25～30節、ルカ伝10章21～24節）

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す」

「私が來たのは、義人を招くためではない。罪びとを招いて、悔い改めに導く
ためだ」

とか、そういうことを仰つた。その聖書の箇所を引いてあります。それから、もうひと
つ私の大好きな言葉は、

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません」

この世で重荷を負っていない人、これはキリストのところに来ませんわ。この世で重荷を
負つてもうへたれこんで、

「もうどうしようありません」

と。その人の運命、環境、いろいろあるでしょう。生まれ育ちもあるでしょう。いろんな
ことで打ちひしがれて、もうこれ以上歩けないという人に対して、

「私のところに來なさい。私が休ませてあげるから」

と。休ませてもらつたら力を受けます。詩篇46篇に、

「神は我らの避難所また力、悩めるときのいと近き助けなり」

とある。ルターがあの宗教改革のときに抛り所にした応援歌です。

「神はわが避難所」



という。「避所」とは、窮地におちて逃げ込む所なんです。防空壕、避難所です。ところが、避難所に入ってみたら、力をいただく。そしたら、力をいただいて出てくる。そこから新しい戦いが始まるという。こちらをしつかり受けとつてほしい。

「神はわれらの避所、また力、悩めるとき^{さげころ}のいと近き助けなり」

と。ですから、

「凡て労する者・重荷を負う者、われに^{きた}来れ」

と言われて、キリストのところで安らつたら力をいただいで、

「さあ、もう一度出陣します」

と言つて出かけて行くという、そういう姿、これを受けとつて欲しい。

●復活して顕現したイエス

それから三つ目、

《3 復活して顕現したイエス

「マリヤよ」「ラボニ」（ヨハネ伝20章16節）

エマオへの途上における旅人の姿のイエス（ルカ伝24章13節以下）》

エマオへの途上での旅人の話。二人の者に旅人の姿で現れたあの姿が素晴らしいから、私は京大で「エマオ会」と名付けて聖書を読む会をやってきたけれども。この姿と、それから感動的なのは、ヨハネ伝20章16節の「マリヤよ」「ラボニ」の問答です。マリヤは一人泣いていた。弟子たちは、

「ああ、イエスは、誰かが取り去ってしまったて、お墓の中を見たら、空っぽだった。布だけが巻いてそばにある。ああ、おかしいなあ」

なんて思いながら帰って行った。ところが、マグダラのマリヤはそれであつさり帰る気にならない。泣いていた。そしたらそこにイエスが現れた。それは園守^{そのもり}だと思った。つまり墓の番人だと思った。

「あなたがイエスをどこかへ連れ去ったなら、戻してください」

と言つたら、その番人は、

「マリヤよ!」

と呼んだ。

「あつ、イエスだ。ラボニ! 先生!」

と。「マリヤよ」「ラボニ」と。あの感動的な場面。これが我々に対してイエスはいつも「マリヤよ」と呼びかけてくださる。我々は、

「あつ、主さま、そうでした。見えるところに囚^{とら}われてはいかん。見えるところを超えた、その本当の根源現実において、あなたは今も私たちを励ましてくださつて、いる活けるキリストさまで、主さま、アーメン・ハレルヤ!」



と。これがクリスチャン人生だと思っています。

ですから、どうぞ、皆さん、クリスマスを単にキリストの生誕を祝うなんていうんじゃない。キリストのなさったことがあまりにも凄いから、

「それでは、そのお方がどんな生まれ方をなさったのか」

と遡っていったら、クリスマスに到達した。ルカ伝の始めにありますように。なさった御業^{みわざ}の凄さがキリストの誕生を掘り起こした。この世でもそうです。ノーベル賞をもらった人の、

「ああ、こんな人を生んだのはどこの両親なのか」

と探し回ったところだったと。だから、皆さんは、皆さんの生涯が素晴らしく輝いていたら、

「こんな素晴らしい輝ける一人ひとりを産み出したのはどこの誰か。あつ、キリス

トさまだった」

と。産みの親ではない。キリストさまが一人ひとりに第二の誕生を——肉体の生まれた第一の誕生に対して——霊から生まれた第二の誕生をくださって、クリスチャンとして、キリストの証人として、キリストの神の栄光が現れる器として、生まれ変わって生きているその姿、それに打たれた人が、

「ああ、そうか。それでは、自分もキリストのところへ行こうか」

というふうなことになるばいいなあ、というのが私の感想なんです。ですから、皆さん、見えるところによらない。

「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続く」

とあります。そのように、現象界、見える世界、そういうものに囚われないで、その奥にある神さまの本当の愛の御意、キリスト、活けるキリスト、そのお方がいつも一緒にいてくださる。入ってください。励ましてください。支えてください。その御言が集約されているのが聖書である。そんなふうには、認識を新たにして、もう一度新たな新しい誕生を、今日をきっかけにまたやってください。三度目でも、四度目でもいいですよ。五度目の誕生でもいいですよ。そういうふうにして、このクリスマスを送っていただければ、たいへん幸せだと思います。

はい、もう時間がきました。それでは、これで終わりたいします。

● 祈り

短く祈ります。主さま、あなたは天衣無縫なるお方。型にはまらず、本当にあるがままに、神の幼児^{わがこ}として生きてくださいました。この世の人とはかく己にとらわれ、恰好を整え、人の前を気にいたしますが、あなたはそれらをふっ飛ばして、

「あなた方は既に神の子だよ、神の子となる権を与えられたよ。私が道となった。生命を無条件に与えるから、私を受けとりなさい」

といって、呼びかけてくださっているのがこのクリスマスでございます。



主さま、どうぞ、ここに集われたお一人おひとりが本当に、

「今日、新しく目覚めました。新しい世界に導かれました。神の御子キリストさま、どうぞ、わがうちに入り、私の救い主となつて、私を導いてください。私の家族をまた救いあげてください。私の周りの人たちを救いあげてください」と。新しい祈りと使命をいただいて、また出発しようございます。

来年のクリスマスを迎えられるかどうか、誰もわかりません。けれども、我々は既に地上を乗り越えています。あなたの永遠の生命をいただいています。ですから、私たちはどんなことがあっても、へこたれません。パウロはその模範を示してくれました。

「我この宝を土の器に持てり。これ優れて大いなる力の我らより出でずして、神より出づることの現れんためなり」

「死んでいるようでありながら生きている。倒さるれども滅びず」

と、あのコリント書簡で言ってますように、私たちは常に、本当に逆説的な生き方をするような、どうしようもない生命のかたまりでございます。その生命の生命があなたご自身でございます。無条件でご自身を下さったこの恵み、これをここにお集いのお一人おひとりが、「はい」とそのままいただいて、新しい霊なる人として生まれ変わって、これから日々を過ごしていけますように。

主イエス・キリストさまの尊い御名によつてこの祈りを皆さまの祈りと共に、今、御前にお捧げいたします。アーメン。

